

文学博士古野清人君の「キリシタニズムの比較研究」に対する 授賞審査要旨

本書は古野清人君の宗教社会学的立場によるキリシタニズム (Kirishitanism) 日本のキリシタン宗門と称せられている宗教形態) の研究の成果である。

本書において古野君はキリシタニズムの分析に当り、シンクレティズム (Syncretism) 相異なる二つ以上の文化がそれぞれその本来の特徴を残したまま習合している状態) をその基本的特徴として捉え、これを中南米等における異教的キリスト教 (Christo-paganism) の姿と対比して解明している。

本書の構成は、前篇七章、後篇五章よりなる。前篇第一、二章は、キリシタンの史的展開の紹介であり、問題点への導入部である。第三章の「キリシタン宗門の構造」は、「俗信と習合」、「一神教の観念」、「組・講の組織」、「集団改宗と集団棄教」、「日本人聖職者」などで、異教的キリスト教構成への説明因子を挙げている。キリシタンは、集団改宗を通してキリシタンとなったのであるが、この歴大な数の農漁民は、改宗につづく厳しい宗教教育を必要とした。然しその際、教職者に日本人を登用することへの躊躇によって生じたキリシタン教職者の不足と、迫害の急速な展開とによって、その宗教教育は甚だ不充分なものとならざるを得なかった。ここでの集団改宗と集団棄教とに関する著者の資料に基づく詳細な論述は特に注意せられるべきである。この農漁民を中心とするキリシタン集団は、組或

は講の組織によってその持続を可能にしたが、その指導者達の信仰は厳密な一神教ではなかったとする。

さらに、第四章では、キリシタン宗門成立の最初の一世紀においてさえも、それは、ヨーロッパ的カトリシズムではなく、異教的キリスト教であったとする。次いで、外人の指導者を失い、且つ厳しい弾圧のもとで、この異教的色彩は更に強まっていったのである。第五章「浦上のキリシタン」では、江戸末期の浦上キリシタンの様相と、キリシタン集団の組織、組をめぐる問題が取り扱われ、第六章「文化年間における天草キリシタン」は、富津、大江、高浜三村での「糺方日記」によるものであるが、ここで部落ごとの、或は家族内での、キリシタンの諸様相が詳しく述べられている。第七章の「生月キリシタン」は集約的な現地調査の結果であり、資料的価値に富む。現在のキリシタン地域の中で、集団組織の面で最も堅い形を維持している生月地域を捉えて、キリシタニズムの諸様相を克明に調査し記述している。

後篇は「概説」、「キリスト異教主義」、「集団的改宗」、「洗礼」、「コンパドラスゴ」(compadrazgo 名親制度)の五章よりなるが、その前二章では、中南米におけるシンクレティズムの姿が取り上げられ、後三章では、中南米等及びスペイン、ポルトガル、バルカン諸国等における儀礼的親族関係が主として論ぜられている。この儀礼的親族関係の様相の観察と比較、及び本書全体にわたる組の組織の詳細な記述と分析などは、宗教社会学的研究の業績として特に注意せらるべきものである。

以上の如く、本書は著者自身の現地調査、資料蒐集に基づく研究であり、同時に中南米等における諸様相との比較検討がなされており、キリシタン研究の書としては、現時点においては、特筆せらるべき労作である。

本書は古野君の多年にわたる数多くの著書中「シャマニズムの研究」(古野清人著作集第三、一九七四年五月刊)、
「原始宗教の構造と展開」(同第二、一九七四年一月刊)、「高砂族の祭儀生活」(同第一、一九七二年五月刊)など
とともに、宗教社会学研究の進展に寄与するところ大であると考えられる。